聖霊降臨後第21主日　聖餐式説教　@奈良基督教会　　2020年10月25日

『一に謙遜、二に謙遜、三、四がなくて五に謙遜』　＜マタイによる福音書22章34-46節＞

今、わたしたちが「旧約聖書」と呼んでいる書物は、イエスの時代の人々、ユダヤ人たちが聖書として大切にしていたものです。もちろん、2020年現在でもユダヤ教徒にとっては、この「旧約聖書」のみが聖典ですから、それを勝手にキリスト教徒が「古い契約」と言う意味で「旧約」と呼ぶのは彼らにとっては大変失礼な話です。ですから、近代の神学者たちは、イエスの生涯と教え、そして初代教会の歩みが書かれた「新約聖書」に対して、「旧約聖書」とは呼ばず、「ヘブライ語聖書」と呼ぶ傾向があります。

そのヘブライ語聖書は、大きく３つ、律法、預言者、諸書というカテゴリーに分けられていて、その中でもとりわけ、モーセが書いたとされる、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の5つを含む「律法の書」が一番重要とされていました。そこには山のように神の掟が記されていて、その戒律の数はなんと６１３あったと言われています。律法学者やファリサイ派の人たちは、これを全部覚え、それらを分類し、重要なものとさほど重要でないものを区別しようとしていたようです。

一人の律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねました。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスの何をどう試そうとしたのかは、文章からは分かりません。ファリサイ派と律法学者たちは、普段から、安息日に病人を癒すなど律法をないがしろにしているかのように見えたイエスをなんとかして逮捕せねばと考えていたのは確かです。ですから、いろいろと質問攻めにして揚げ足を取ろうとしていたのでしょう。（先週の箇所もそうでした。「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか。適っていないでしょうか。」）

律法の中で、どの掟が最も重要かという問いに対し、イエスはすぐさま答えます。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』　これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

これら二つは、申命記とレビ記に別々に書かれた掟です。この二つの戒めを守ることによって人は残りの全部に従うことになるのだということをイエスは言われました。この答えを聞いた律法の専門家はどう思ったのでしょう。「さすがだ。確かにその通りだ」と感嘆したのか、「くそっ、いまいましい！」と舌打ちしたのか。聖書には書かれていません。きっとその明快な答えとそれをさらっと口にしたイエスの凡人とは到底思えないそのオーラに、何も言い返せなかったのでないかと想像します。

神を愛し、自分のように隣人を愛する。とても簡単に聞こえますけど、非常にスケールの大きなことです。聖書のすべての教えがこの二つに基づくというわけですから。愛とは何なのでしょうか。コリントの信徒への手紙 I、第 13 章に、パウロは次のように書いています。「たとえ、人びとの異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。」「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」

この箇所は、わたしが今チャプレンをさせていただいている京都の平安女学院において、毎年の入学式と卒業式で読まれます。「愛を持ちなさい、愛ある人になりましょう。」わたしたちはこの聖書の教えを伝え続けています。どんなに素晴らしい学業を修めても、どんなにビジネスで成功しても、どんなに社会に貢献する人となっても、どんなに信心深い人であっても、愛がなければ無に等しい。無に等しいとはいくらなんでも言い過ぎではないかと思いますが、神様から見たらそうなのです。考えさせられます。

聖書の根幹とも言える、この「愛」「愛する」とは何なのでしょう。「隣人を自分のように愛する」というのは、なんとなくですが分かります。みんな自分が一番かわいい、一番大切。その思いを隣人にも向けなさいということなのです。またそれが非常に難しいことであるということも、同時になんとなくわかります。

しかし、その前の第一の掟である「神を愛しなさい」、それも「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして愛しなさい」というのはとっても分かりにくくないですか？　神様は隣人と違って目に見えないからです。声も聞こえず、触れることもできないからです。愛したとしても、その返事がもらえるのかもらえないのかもよく分からないからです。難しいことなのか、とてもシンプルなことなのか、それさえもよく分かりません。

「神を愛する」その意味を知る方法は、しかしながら、ただ一つあります。主イエスの生き方を知ることです。それしか、わたしたちにお手本はないのです。では、イエスはどう生きたのでしょう。フィリピの信徒への手紙 2 章には、こう書かれています。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しいものであることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じものになられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」イエスの生き方、それは、神に対して従順に、謙遜に生きるということだったのです。

高慢にならず、謙遜に生きるということ。自分の弱さを知り、神だけにより頼んで生きていくということ。すべてを神に委ね、栄光を自分ではなく、神に帰すということ。人間にとって、それも特に現代の競争社会において、それはとても難しいことです。もう何十年も昔のことですが、神戸にいたとき、高校生の頃だったでしょうか。ナザレ修女会の修女さんのお話を聞いたことがあります。その方が何の話をされていたのか全く覚えていないのですが、話された中でただ一つだけずっと心に残っている言葉があります。それは、「キリスト者の生き方というのは、一に謙遜、二に謙遜、三、四がなくて、五に謙遜。謙遜以外ございません！」という言葉でした。当時はあまり意味が分からなかったのですが、その断言の仕方があまりに強烈で心に焼き付きました。

大人になって、本当の意味でキリストに出会い、またたくさんのイエスに従って生きようとしておられる先輩クリスチャンに出会い、そのことが少しずつ分かってきた気がしています。

先日（わたし個人のフェイスブックに投稿して、この教会の何人もの方が「いいねボタン」を押してくださったので、既にご存じの方もいらっしゃるのですが、ついこの間、）近くに素晴らしいコーヒーの豆屋さんを見つけました。見つけたと言っても、ぶらぶら歩いていて偶然にというのではなく、ある方に紹介いただいた雑誌の記事を通して知ったのです。それは、お店の創業者へのインタビュー記事でした。その方は今年 93 歳。戦後まもなくから 65 年お店を続けられ、奈良でのコーヒー豆焙煎の草分けとも言われています。戦中戦後の苦難を生き抜き、コーヒー豆とどのように出会ったか、豆に対する思いなどが書かれていて、お店の佇まいとその創業者の深い皺が刻まれたなんとも言えない表情の写真に惹かれました。そして、面白いと思ったのが、お店の名前です。「凡豆」というのです。コーヒーの原点と言われるエチオピアの言葉で、コーヒーのことをボンというらしく、これに漢字を当てはめたということなのですが、創業者は、平凡の凡に豆と書いてボンズとしたとのこと。素晴らしく質の良い豆を、だれもが安く毎日味わえる平凡な豆として提供したいという思いが、その名前に込められたそうです。この世のだれが、自身で苦労して手に入れた最高級の豆を、最高の技術をもって焙煎して、それを平凡な豆と呼ぶでしょうか。わたしただったら、間違いなく、一目でプレミアムというのが分かる名前を付けることでしょう。またお店にしては珍しく、日曜日が定休日でした。なんとなくですが、まったく儲けようとされていないことにもとても魅力を感じました。

それで、行ってみました。お店に一歩入ると、芳醇な香りがわたしの身と心を包み、ものすごく幸せな気持ちになりました。93 歳のご主人は圧迫骨折をされて奥で休まれており、今後継者となっておられる娘さん夫婦が丁寧に、そしてものすごく喜んで出迎えてくださいました。豆はとってもリーズナブルな値段で感激し、帰りにお店の写真を撮らせてもらっていいですかと聞くと、ご主人が奥からそろりそろりと出てこられ、何も言わずに一緒に隣に立ってくださり、ただただ感激しました。

喜びにあふれて、家に帰り、深みのある美味しいコーヒーを入れて、さっそく写真をフェイスブックに上げると、すぐある方から「この方クリスチャンですよね、前に行っていた教会にお一人で来ておられました」と連絡があり、胸が熱くなりました。

神を愛し、人を自分のように愛する。それは、神様の前に謙虚に、謙遜に生きることなのです。命、能力、富、家族、友人、健康、わたしたちが持つすべてのものは、自分で勝ち取ったものではなく、神様のものです。わたしたちキリスト者は、それらを主から受けて、主に捧げます。それは、すべての栄光を主に帰し、自分に与えられた賜物をまわりに生きる人びとと分かち合うということなのです。さあ、わたしたち、明日から、どのように生きましょうか。わくわくしながら、主イエスに従う道を歩んでまいりましょう。

（最後にもう一度、本日の特祷を唱えて終わりたいと思います。）